



柳菴栗原氏校訂

十編

重修真書太閤記

東都書肆

知新堂發兌



重修真書太閤記十編總目錄

卷之一

羽柴勢三州勢手配之事
并兩方先陣勇戰之事

卷之二

淺野蜂須賀尾州勢と破る事
并秀吉自身三州旗本へ向ひ参入事
榊原康政諫言の事
并本多忠勝勇戰の事

卷之三



羽柴宰相三列御所凱陣を勧る事

并内府信雄公秀吉卿と和睦の事

卷之四

秀吉卿大納言に任せらるる事

并本多平八郎忠勝異見の事

浅野堀尾等濱松に使者の事

并於義九殿秀吉の養子と成る事

卷之五

諸國之大小名秀吉に隨順の事

并佐々木義郷召出事

根來衆徒再ひ一揆等と催ふ三城に籠る事

卷之六

根來寺衆徒退散の事

并後藤又兵衛基次の事

大納言秀長卿根來寺へ押寄る事

并秀吉公謀略の事

卷之七

秀吉公再度不意を討事

并根來衆徒等滅亡の事

千石堀濱の城合戦の事

并一揆等兩所退散敗軍の事

卷之八

秀吉公太田城水責の事

并一揆等降参の事

秀吉公高野山を攻る事

并紀州平均の事

卷之九

長曾我部家系の事

并軍議評定の事

石田龙吉三成 長曾我部元親へ使節の事

并四國攻決定の事

卷之十

加藤清正三ヶ濱と乗取事

并小早川後詰洞古合戦の事

加藤清正再度洞古合戦の事

并五十路井内匠生捕事

卷之十一

清正五十路井内匠と降を事

并三人衆人質と送る事

清正松山の城責る事

并長曾我部信親後詰吉川元長敗軍の事

卷之十二

金子傳兵衛吉川勢と破る事

并熊谷四郎左衛門尉勇戦の事
加藤清正松山城と乗取事
并金子傳兵衛久武内藏之助と救ふ事

卷之十三

金子傳兵衛再度勇戦の事
并五十路井内匠より使者の事

卷之十四

吉川小早川長曾我部信親合戦の事
并金子傳兵衛軍の事
金子傳兵衛智謀の事
并吉川勢夜討の事

卷之十五

吉川拔掛難戦の事
并信親合戦両川敗軍の事
加藤清正加勢の事
并両川對陣小早川智計の事

卷之十六

浮田黒田讃州發向の事
并後藤又兵衛惡風渡海の事
細川源左衛門尉偽計の事
并小西彌九郎不覺の事

卷之十七

信親讚州後誥勇戰の事

并後藤又兵衛智勇の事

大納言秀長卿淡州著陣の事

并曾呂利新左衛門尉の事

卷之十八

大和大納言近江中納言阿列渡海の事

并後藤又兵衛智謀の事

長曾我部掃部頭夜討の事

并秀次勢大麻山と責る事

卷之十九

後藤又兵衛大麻山と責落と事

并長曾我部掃部頭勇戰の事

大納言秀長卿一宮城責の事

并長曾我部信親後誥の事

卷之廿

小西彌九郎拔掛難戰の事

并上方勢敗軍の事

上方勢四國勢と合戰の事

并長井半十郎勇戰の事

卷之廿一

加藤清正智謀の事

并四國勢敗軍の事

卷之廿二

清正金子傳兵衛を討る事

并加藤吉川勇戦の事

加藤清正土列發向の事

并清正道かき山林を押行事

卷之廿三

加藤清正焼山城と乗取事

并上方勢金子傳兵衛尉合戦の事

卷之廿四

金子傳兵衛尉勇戦自殺の事

并熊谷四郎九衛門尉被生捕事

卷之廿五

四國勢切所よもつて清正と拒く事

并内大臣秀吉公南海と航あふ事

後藤又兵衛尉陣氣と見る事

并五十路井内匠一宮へ行谷忠兵衛子説江村

を降し事

長曾我部元親本國へ歸る事

并福嶋正則勇戦の事

卷之廿六

長曾我部信親大濱子籠城の事

并秀吉公陣取手配りの事

三ヶ國へ出張勢皆土列へ引退事
并上方勢八方より土列へ討入事
卷之廿七

長曾我部信親武勇の事
并加藤清正高知責の事
片桐助作大濱へ使節の事
并信親高知へ赴く事

卷之廿八
信親父元親と説事
并片桐智謀元親降参の事
阿列公方家由來の事

并長曾我部元親上洛の事

卷之廿九

秀吉公關白職及び五奉行の事
并豊臣朝臣姓を賜ふ事
大佛殿建立の事

并北野大茶湯の事

卷之三十

秀吉公御道具目録の事
并利休茶器の事
後陽成院聚樂亭行幸の事
并供奉行列の次第の事

重修真書太閤記十編總目錄終

重修真書太閤記十編卷之一

羽柴勢三州勢手配の事

并兩方先陣勇戰の事

三州勢へ小牧山に屯して御所へ清洲に入御す
 まこと此頃瀧川左近將監一益の越前國大野より
 居たりけると秀吉卿舊好と思ひ出らば江州南
 郡に於て五千石の地と與えあひしう一益も秀
 吉卿に從ひ富田平右衛門尉と共に伊勢國木造の
 城を守り居たり又尾州蟹江城より北畠内大臣信
 雄公の家臣佐久間駿河守正勝と籠られ前田城に

へ前田與十郎とれり西下市場城より前田與平
次大野城より山口長次郎と籠らせけるは信雄公
まゝ萱生よ要害と構え佐久間駿河守とて是と
奉行をいぬその留守のうち前田與十郎と蟹江居
しむ瀧川左近將監のとき時節ありとたのひを
そつと使者と與十郎方遣らし我等は知あふ如く
柴田よ一味して秀吉の敵とありつる身なり然る
と秀吉さつと心よこしむとなく祿と分る城
を預く其心中の廣大あることたとへと取よめぬ
一一定天下の主とありあふべくあめられぬなり
其御邊りとの武邊といひ器量ありあつる人と

知あふぬ北畠殿の御下よ朽くぬと近頃以
て糸惜く存いなりとや御勘辨ありと然るべく
ゆ違くる終よ三家老の如くなりあふへとありと
いふと一うの與十郎も實とあひの遂よ一益も同
心たりしむと一益まゝと與十郎とて山口長
次郎と説しめていふと北畠殿の心をくく人
と積ひあふと強けし功あふ身と立る地あく
功あふの身と損るると津川岡田淺井と同一なる
へ早く處分と定めあへやといひうとも長次
郎重政さつと二心と存をば是よ於て與十郎蟹江
よ入置し長次郎も母と殺をいふと云送りし

めとも重政ちとも動をば我母此城に入ぬ時宣
 ろく漢の王陵り母とあらんこ難くもおのろし汝
 ろく王陵とあしやといましめらむこ只今正ふ
 其詞の合んる時あり重政よこしく王陵とやう
 て佐久間駿河守頼まねし恩義と全くとへし是
 母の意違ふぬ処ありといふ瀧川左近将監あれ
 と聞て其義あつんとて九鬼大隅守嘉隆を語らひ
 海陸より推寄て大野の城とつらむ九鬼り船十餘
 艘大野川と漕上り城に上らんとせらむと重政松明
 と投てあしと焼めと先陣二艘へ既焼失した
 る九鬼り兵上陸しける山口長次郎急よあしと

討たりしむと瀧川り兵も進得をこりしむ
 らと井伊兵部松葉の郷あり馳來て海陸の寄手
 と拒く北畠殿あのみと聞食梶川五左衛門尉秀
 盛小坂孫九郎雄吉二千餘騎をこしとへて是と
 援らむとあしと長次郎あり拒さ戦ひけるよと
 り援兵の兵もよと力と竭しと終に瀧川九鬼
 の兵士うちまげて引退く北畠殿もやうて大野の
 渡御ありて山口誠忠と感しあしとめしけるよ
 と宣ひしむと長次郎も面目とんとあしけるよ
 そのうち三州御所尾州海東郡戸田に渡御ありし
 時本多平八郎と御使よて山口と召して仰出さしと

ける山口長次郎事先年佐久間右衛門尉より從く
高野山より上り佐久間と見捨を今より龍川に説く
從く節義といひ忠心のいひ當世得く侍る
こととて御馬を賜りてけり

作者評云子とて母を質とて母の害をうる
とて己の節義と立る安んぜざる所之故
余父の身とて己を解し抑子の為に質と
あらん時我身と活しと子と不義に陥るは天
下の人を笑はるる時ハこそ亦その辱めを避
る地あり我を殺しと子の義と立しむる時ハ天
下の人とて此父より此子ありと賞歎し

止るるより故に人の父とあるもの母とな
るもの能此処と思ふことよきを

六月ふいつて瀧川左近將監り預る処木造の近
邊の百姓とも相集りていひける様北畠殿といひ
我等遠祖より伊勢の國司よりよきをいそ
もとも我等累代の主君よりよきあり木造殿
といふも北畠殿の庶流をいふも後入へをいふも
みゆ前も我等の北畠殿もこそ後入へをいふも
也瀧川左近といふいひのくの人あるや我等の知
らび左近も後入へく我等も大将よと云出く
一人二人と聞えくも五人十人乃至百二百人及び

ける不どよいでや左近り大野攻め向ひて留主を
幸は一攻せめて見せやと云ふとあそあし一志郡の
地下人共聞傳へてせ集り紙幡紙幟おしきたり
幾組より組合を大手うめて備と立ちや二三千
人よ及びひしうの木造近く押來り鉄炮をくらり関
と作りけるより富田平右衛門尉大に驚かすの
無勢よと一揆の多勢よりけあやまことたらんよ
何とあるへさそつりもあしあしらふて城よ
取らる様のよあそへさしうとと一揆よはうひ
を立て申けるハ何事の誑は左様ある徒黨をいふし
つると願ふとあし難義の筋とくゆ申とりのこと

あも叶ふつとちうとありけると一揆の大將聞と
うまの使と囚えてうへさば願ひとのあ余の義
よあし城を明て富田も龍川も罷歸りけしと申
さやとのひあしめ耳畠との返とへさしうとを
とまていゆるとありと云て陣門を追出さうり
使者大汗よりけ城より返り富田よりくと申
けし富田以外の外よ仰天しもの一揆の陣の様と
問けし使者答ふる様さしひのまの本陣よりけ
三重入幕と張幕の内外よ檢見と置き本陣よりけ
鐘大鼓とうけそし役人何れも甲冑して嚴重
よとあへと設けその傍よ褒美の長持りしとあれ昇

つゝの筆取三人帳と扣えてさし圖とまの体誠と
次第とくのひて見えゆさそ大将の誰とあらん
名も聞えゆとも年のいと四十許とて鬚多く
黒崎あり後の地下人ふもあつて定めで上方
の浪人あり業ありんとあつて談りし富
田より驚き然勢は凡何れと見つると問へさ
まのひ五十人ありひり立たる鉄炮の隊外幕の内
左右ふ配りて五立り立たせのひり五百の鉄炮あ
りと知召へその次は長柄のの同く五立り
立たせは是も五百本ありと覺えゆ中の幕の内は
弓と五十人つゝ三隊ありと左右ふ配りたれは

是も三百人とあゆられ然しは是等の負千三百
人をも手替りして二千六百人なり此外は侍
のりをも目も及ばぬ立りし處より凡二三
百人の見受け猶幕の陰に何れとの人を置ゆは更
よあゆひり不申凡千餘人あり然しは總
勢三千の外二三百もゆひあん恐ろしくとてり
げしは富田よりあつてつとよも瀧川と
びて其上のとも云大野へ飛脚と立たりけるよそ
の夜一揆のの共近々とお寄来り関と作り鐘
とありし只今責りし体とありし富田取ゆ
のも取あつて夜中よ城と出りつゝともなく逃た

りけり瀧川左近將監と前田與十郎といへ大野の城
と責て居たりけるよ木造より飛脚到來し一揆の
様を注進したりしう瀧川左近も前田與十郎も
肝とほめし木造の近隣ふとつの一揆おこるへ
といひのひのさりし大野の城つとさのさるる
思議のことなりたる大野の城つとさのさるる
後兵もよ次第に押來りつとこの城を落さんと
のひのさるるの際に木造と攻取しと後悔を
共せんありしへ早く人数と引上て一揆を追拂
へゆといひし大野とて前田下市場の両城
よ入らんとすけるを見て井伊兵部真先よ進

敵の當地と引去と見えたり追討しよとゆといひ
ふとあそあし六月十六日の早天よあしつ火
とらしと戦ひし瀧川左近つとさのさるる
小舟よ取のりひそり城と出て逃去けり明と
十七日の曙より石川伯耆守安部彌市郎とよひ北
畠殿の加勢一同よ兵部と助け切りけり
城りとも随分ありしととも寄手の勢
大浪の打返を如くといひけり下市場の城
あしつ十八日の明りよ城主前田與平次何
ともあし逐電しとけり
重修真書太閤記十編卷之一終

本門言一編卷一

重修真書太閤記十編卷之二

淺野蜂須賀尾州勢と打破る事

并秀吉自身三州旗本に向ひあふ事

六月十九日三州勢并内大臣信雄公の御勢一同
下市場城を十重廿重み取圍んで攻戦入城の本
人前田與平次り兄甚七郎種定ひそりみ城と出九
鬼大隅守り陣船に趣き早く加勢とて入城をん
こと頼こりくハ九鬼一議も及る船とおし出
し下市場の城よ入んとつるみ折しも潮引て遠
く干瀉とせりくハ徒に城とありめてるもの

大目記一編卷二

沖^{そと}またつらふへうめくる處へ三州の岡部彌次郎長
盛^{もり}生^{なり}年^{とし}十九歳せし許され剛^{がら}の者也津島よりも
みよ揉^{もみ}て馳^こ來^きりける大隅守り番船の渚^{しづ}よそふ
て船とりけ居たる處へ押寄て鉄炮と打りけ烟の
いよ絶^たさるゝと見計^{みけ}ひ面もあつて切^きり
けし九鬼りめの共狼狽^{きやうたい}廻^まり水よ入て逃^{のが}るゝの
の數^{かず}と知^しび岡部よとりし手勢といさめて突^つふを
つこふを攻^せりし九鬼り手の者戦^{いくさ}ひまひ散々^{さんざん}よ
なりて逃^{のが}るゝと岡部り侍^{ざむらい}よ朝比奈金兵衛とて
力^{ちから}の三十人よて上下^{かみしも}一人よて自由^{じゆう}よ
とる若者あり打物取てハ駿遠^{せんえん}三よ並ふのめると

めのちりける九鬼り船よ乗^{のり}るゝり堅横^{けんごう}十文字
よ切^きてハ切^きるゝ切^き心のまゝよ狂^{くる}ひまゝりける
ると見て九鬼り侍^{ざむらい}大将^{たいしょう}九鬼長兵衛よと敵^{てき}のふ
ふよひやつてのめを見をとんと云^いふよ五尺^{ごせき}りける
の長^{なが}刀^{やいば}と以^もてりけるをよ金兵衛ちと遣^{つか}
過^とし誰^{たれ}とあのへハ九鬼長兵衛いつと遠州^{えんしゅう}難^{がた}
よと出^い合^あひのち絶^たて久^{ひさ}く面^{おもて}と合^あはせよれや我^{われ}
等^らり太^{たい}刀^{やいば}の錆^{さび}とをとんと打笑^{うちわら}へハ長兵衛も持たる
長^{なが}刀^{やいば}取^と直^{ただ}し朝比奈と急度^{いそぐ}とつりよも四五年以
前^{まへ}伊豆^{いづ}國^{くに}へ働^{はたら}きし時^{とき}白輪^{しろりん}の沖^{せき}よ船^{ふね}りける居たり
し時^{とき}獵^ま船^{ふね}よと漕^こ寄^よたりし駿河^{しゅんが}武士^{ぶし}との時^{とき}ハ其方

運こりて逃にたりし今日の遁にさし覺悟をよしつひ
つつつつも打寄て互にとこと伺ひ居たり金兵衛
ハカつつつ上ふ年いまさ四十ふ満を長兵衛ハ長
刀の達人ふとも齡とては五十と越たりゆと聲
うけて打合ハ又引開つて左右ふらうとさつと拭
とハとと離と七十餘合ふ及へとも双方聞えし
上手更ふ勝負も付け金兵衛太刀を投ててしれ
や組んと走りめる長兵衛ハ組とと長刀よて
あらひし杭柱よらうらうてあのここには潰く
処と金兵衛はとうげらうて是と押え終と擒よし
たりけと長兵衛くちらうし後ハとり敷働くの

のあらうりげるまらう九鬼ノ船ハ本國志州とさし
て引返をめらうのちハ瀧川左近將監もたらう
ゆゆ船よ打のり逃げると北畠殿の勢とと間あらう
ゆ追掛らうハ瀧川ノ手の者散々と逃らうしける
と爰よ追つめらうハ責付多勢と討取あらうつこ
へ一益り馬印と奪取てけり三州勢も間宮造酒丞
松平新助忠綱も先進て戦ひけるハ亂軍のうち
ちよ討とげらうしその夜とと成時とあらわし
さ頃瀧川城と出て行方しらばあらうし下市場
の城ハさと落しけらうし然る生捕のめのとをめて
瀧川ノ行衛と問ふ蟹江よ入らうしといふまらう

うささの敵は足とためさるゝとのふれとあを
 蟹江とさして發向し大手の門みおしよを息を
 も継せし責たりけり三列勢の中子本多八藏長久
 手みて森武藏守の死骸を得て其太刀刀を分捕し
 つれとも死首おしは是を取どあまうよ本意ふと
 とみ思ひしうの此処よ能戦ひ敵味方の目と驚
 うし終戦死たりけり一益り子瀧川三九郎殿
 したうびると水野藤十郎勝成の敵と見し追う
 げくるよ三九郎も藤十郎と見知たり互に後日と
 恥たうしうの馬と駐めて鎗と合を散る火花の電
 光石火よこもをぶ突つはう追つうへ

つめけてはうささめうみては又りけめへし兩人
 とも參河尾張の隣國あり常に出合知つ知し中
 てハあり秘術技盡以若武者のおとらぬ藝をめさ
 すし三九郎ハ父左近の行衛をおめい如何あり
 志と片心よかけて思入を親と子の思愛とあて知
 しけれ藤十郎ハ三九郎と是非打取て高名みせん
 と踏込く戦ふを早くも三九郎心よさとうをまきと
 伺ひ一鞭あつて馬の名よ負篠島牧天よも騰る
 勢し城門のうらよ走入る藤十郎ハ手よ取し敵
 と取らしいと本意あけし引りへて六月廿一日
 三列の御本陣小牧山よの頃下市場其外よと

討取一上方勢の首とも獄門よりけ其軍功を賞
せしむる秀吉卿の大垣より江州へ凱陣ありあつて
廿二日三州勢ありびに信雄卿の御勢追手搦手
より蟹江よりを取圍て攻立しうの瀧川左近
將監以下日置五左衛門尉谷崎忠兵衛瀧川彦次郎
必死となりてあつて守る秀吉卿より加勢とて
淺野彌兵衛尉蜂須賀彦右衛門尉と下されしうの
瀧川のよき力と得て堅固に守り拒み戦へしうの
こつへしとも見えび淺野蜂須賀兩人へ元より加
勢の事なり尾州勢と一合戦して日頃の武勇を顯
くしこくゆとたのひけるより瀧川の勢とありえ

は兩人の勢千五百余騎と一手よりけ信雄公の御
勢の渦巻て扣えたる中へ切て入從横無尋責立
しへ尾州勢多びしともこつりの勢と切たてしと
立足もなり敗走し淺野蜂須賀へ一處に打寄り
し彌兵衛尉軍へよりしと仕たり元より北畠殿
の御あるしと得んとするもあつて然へ加勢の
役へしと齋たり引返さんとあつていひしと云
へ淺野も心得彦右衛門尉ありしと云つて長政も
引返さしとあつてしと一軍をていあしう
るぬへしと思ひしより尾州勢より一當あてし
り然るし思の外尾州勢ありしと味方あつてし

そのよ切勝たり是を切し引取へさなる三州勢ハ宰相殿別の子細あり彼方より切りくらしをハ手さばなうとと旋られし三州勢もいなる意趣もや龍川とハ戦へとも我等手へハ切てもうくらば定めて互に子細あるべし人数と引上んと浅野真先は太鼓を打へ蜂須賀も同く太鼓をうたせて勢を集め秀吉卿の本陣さして引返り秀吉卿ハ江州へ引返りぬける諸軍も下知して勲章の馬さるしと前も後もあし立さを五色の吹貫四つ五つ彼処もも爰も吹あうさをこれハ秀吉卿のつくとあうまはとも定ゆるひたりそ

の次は三州陣と見らるるをハ五本骨の扇の馬あるし前後左右も七八本さうさうたどハのつとやまとの三州御所とよその見る目とよまところを然るよ木深さ森のあかたもりの寄さうけん五色の吹貫ふとあひうとをその勢六七千つとをうたたりをこや秀吉卿の本陣と見る処よこあさうも五本骨の扇の馬さるし押立て勢ハ二三千えめり静々とうけむうよ秀吉卿ハ鎧も著るを浅黄の帷子の脇うさたるよ白さ羅の羽織さそ一尺計の小脇指さし三尺余の太刀とハ馬廻りも持を陣頭ようと出是ハ大内守護の羽柴宰相秀吉さ

り三州遠州の侍も大将もよく聞あへや凡軍も名
あるこのつとも知たることあり名のみさ軍しそ
當代よん身と失ひ後世よハ悪名と流を何れとら
哀しうそや東海道十五ヶ國のうちよ伊豆相模
武藏安房上總あんとよ威と振あると云ある北条の
何某ハ久しく東國の正税と抑留しと都よ運上を
以王土よ住あう王城よ参勤を以然も左京大夫
とやう云よあうとよ左様の田舎人のめめ知ぬめ
のよ向て何をういそん参河國ハ伊勢大神宮の神
衣と調進する故實あるよあの頃絶て奉らぬ由を
てよ聞り遠江國ハ大嘗會の分國あるよその事絶

て久しとりの日月の照を処をく是王土なり私
の知処とおのよつうばハ洲のうちとく王民
なり私の地下人とおのよハ誤あり早く盜賊の余
類よひとと弓矢ととて天下太平万民快樂の
世とやいあんとこの詔よ從ひあへや某く明ら
りよ宣言と傳へるるなり宣言よまうとて心を
改めあそ誰りの過あらん改むると貴とれめ
し又改めあそハハ是謀叛ハ逆の隨一とつよア
某とてよ羽林軍の少將たり忽節刀とささけけ
ふと誅とへしとあしもゆるととや神速よ心
よ問心よ答て秀吉り云処を知あへやとのひあそ

りいと長閑うよ引入たり

神原康政諫言の事

并本多忠勝勇戦の事

三州勢酒井左衛門尉忠次松平主殿助家忠丹羽勘助氏次天野周防守以下長澤の勢とも一手となりて蟹江の大手より向ひ北方へ大湊賀五郎左衛門尉西方へ北畠殿の御勢あり城中より大手海川寺口へ谷崎忠兵衛前田口へ日置五左衛門尉本丸西北の方の拒まざる龍川彦次郎のとも一度も切て出ぬゆゑと戦ひ城中へ引入らんとす

助家忠必死となりて攻戦ふより城中へ入ると得て酒井與七郎忠利生年十八歳蟹江城門大手の橋の上より城中の兵士と鎗を合せ追込追出半時あまり戦ひける終に突勝首を取松平善四郎康安おかり進みて谷崎忠兵衛尉と鎗を合さぬ城の中より放ける鉄炮より申りて倒れし郎等より寄善四郎と肩より掛て引退く松平五左衛門尉近正進み戦ひあまぬ処手と負しうとも一足と引退りし首と取て引返し息繼居たり松平源次郎家乗り手の侍は河合帯刀同才兵衛大手の門に進しより城中の兵士と鎗と合さしうとも相引よ

引ける暇は松平久助松平隼藏鈴木佐衛門今井加
 兵衛梅村喜八郎一同に進んで鎗と合をすつとも
 ろく戦ひ手と負て引退く武井角右衛門大橋新三
 郎兩人の城中へ突て入一足も引を戦死を左衛門
 尉忠次火水みなりて攻付しかの城中以の不り
 難義一終り城門を攻破らむとさり然とも忠次兵
 士氣既疲れしと見てけむの榊原小平太康政是
 れ代りて攻戦ふると二三の丸と攻めありとや
 本丸をうりては六月廿八日小牧山あり
 樂田の堀久太郎陣と伺くをける処堀り手より
 も斥候と出り小牧山と伺ひけるより双方の斥

候途中に出合たりひは鉄炮を打ちけ鎗と合を合
 戦し及び敵味方し手負討死多りしりとも堀り
 手の馬十五疋と奪取ありは三列勢勝軍しけり
 と悦ぶと限りしりしる処は榊原小平太康政御
 前より伺候し申けるは北畠殿の御頼より御出陣
 あせりし事弓矢取の據りさ処よりへとも秀吉
 卿へとては江州へ引返さを給ひひ然らば龍川左
 近將監あとも手痛さ軍しと多く士卒と亡りし
 重詮かともて覺えひそれ秀吉より向て軍仕りし
 ろく牛角の戦よりゆらんとも一益とて敵と
 あさをあせんともへも口惜くひその上小秀

吉の申てい天下太平の勅定とあるは實に恐入て
いなり普天の下王土にあはるべといふことなく卒土
の濱王臣ふあはるべと云とすしと申は本文もいん
かく伊勢太神宮の神衣と調進奉るは三州渥美
郡今田印内市場漆田青津赤松新見の七郷の民の
課役とゆるし加治村浦村大津等とて太神宮に
うらつらふ民等の上と安く沙汰をさすといふこと
秀吉と弓矢を取あはん時のほろもこと存いと言上
しけとい御所も早く御得心ありて小平太をこ
かり取計ふへと旨と仰出されしは康政うこ
まり直ふ家人と走らして其旨と件の郷々へ沙汰

し付たりしは神戸七郷并み三郷のめの共われ
へ太神宮の乃り移らるゝあひしあらんさうとてい
難有ゆたし代の正しき太平とあらんまて男一
人よ弓一張の役といたしうと勤めゆへと誓言
しと申ひりそのち北畠殿へ織田源五郎長益
の即等鳴海喜太郎としく和睦の事と龍川左近將
監と仰下されけるは將監も此軍始終こり敷う
らしとおのひけるはより津田藤三郎を使としく
城と出し喜太郎と共に是軍とくうとすし三州
御所の仰し前田與十郎と誅し一益御旗本入屬と
しく御和睦あるは由と仰出されたり一益勢

とて盡たりしうへ起請文と獻し七月三日龍川
龍近將監り甥龍川源八郎とて前田與十郎と殺
さそ其首と三州御陣へ奉りそのうち一益ハ蟹江
と出て三州御陣へ參上をんもさそつ面ふをとや
思ひけん忍ひかうと都上う花園の妙心寺と頼
みて隠と居たりしとなり秀吉卿ハ蟹江の城の軍
難義ある由と聞召され江州より大垣の城より引
返されしうハ先手の勢ハとて三州勢喰付その
あそひしうは二三町となり然とも秀吉卿
の仰は三州ありめとてあそびの手出とてなうと
と嚴重ハ法度と立ちとつとハ楯突あうべたるを

めうとて鉄炮一つ放めと矢の一筋射出しもセ
ハ三州の御陣よりあの間秀吉の申つることもあ
る書翰もあし其心いとくよ知たるなり又今度
北畠殿家人等の不義と退治をらん勢微弱し
て叶ひしう加勢と頼むとありつとハ頼とたり
しなり天下と亂さんと云ふありびまこ弓矢と以
て人の國と切取我領國を増んと云ふありび秀吉
さそ昔ハ織田家の家僕たしとも今ハ朝廷守護
の王臣なりと云ふも當時參議の頭官に任を
らし八負の座よりつとハ我等如と田舎人との
天地の相違ありと北畠殿ハ朝廷の内大臣より

よびやう参議と内大臣とその差別のさうらうとぞ
やたとひその身卿相と列たりとも主従の禮の
累代と及ぶ事とくちる事とあはれ秩父三浦千葉等の
祖先一度六孫王すべし多田満仲と主とたのむ從
とひらうしより以來源氏累代平氏代々相傳の家人
と親めの累代の主君と仰くみあはれや右大将頼
朝卿の義朝の庶子なり然共義明常胤等の人々相
傳の主君と仰さしとおのへ北畠殿右大臣殿の
庶子なれとも秀吉は於て相傳の主君とのみならず
北畠殿主君はまのし秀吉の家人の列とくちる
事へりし然北畠殿と秀吉と弓矢と及ぶことと

勝敗を以て味方と加らるる秀吉のさうらう勝
道理を以て荷擔をとんとらるる強は北畠殿道理と
勝あふとも云へりし秀吉十分の道理あるもの
あり只主従の邊とて軍をさし助けると云へり
し付て援けをひらう但此方より進んで掛るへ
りしびと堅く制止と加えあへり何とも擧げ握り
ておえ居けるは上方勢の内馬放として三州勢の
備は走入たりしと三州勢のうちより氣早ひる若
の馬の口を取て上方勢と引むけ此馬御陣より
くちを入て誰とてもおろしを馬の主たる人
是へ御入ひて御引取りしと申けるは何と聞

たうへげん上方勢七八騎りげ出馬盗人ふと叫ひ
つ切てうゝる三列勢もあゝ不當なりその方の
馬の逸して此方へうけ入しを取あさく主とたの
福を渡さんと云と馬盗人とハ何事ととやうと
めるとさあいつをを打殺せと鎗ととのて突う
る三列勢今ハ制止も打とをれ面もあうげ馳たり
しうの上方勢も先陣うさげふ續けくと馳出る上
方勢と後陣のつと見ると三列勢も負くと
進くととと大事ふ及ふつうける処へ本多平八
郎忠勝うゝとめり三列勢とと招と逸と一馬
ととめりハ衆の人の知處馬盗人ふあうぬり

ハ既と聞えたり理しらぬ上方勢ハ邊鄙のめのか
らめ三列勢の其中ふ本多と云のめり邊鄙人ふ
のめりえんとつふと上方勢の真先と進と
し武士と引提え馬人ともふ引めと來とハそれ
たとふ續けくと聲々と十六七騎
本多一人と目よりけと追取やけハ忠勝莞尔と打
笑ひとそれと物のふともとうぬりハ此方と
扱えし馬と渡さんとつハ馬盗人とよむと不
當人それと盗人ぬり子細と告とゆと
のより故とつと我とまて追りけ鎗ありま
しと其方達と突と忠勝やうけまて太刀抜り

さし切りくりても己等み切るも本多あつた
た此ののせをたむとみるこのふりむこのい
へ取をもとんそれ請取のこのひあうう鎧うあ
と大の男と馬の上よりたの手へ取らるるえい
と聲うけ投たれ六七間りむとやけとこれ深
田のうちへ尻居よとらと打こよれさうりの男へ
起上らん起上らんとやうりとも深田ていあり
足たぬををんうこやう手とめりさつ狂ひま
るるそあうりけり

重修真書太閤記十編卷之二終

重修真書太閤記十編卷之三

羽柴宰相三州御所凱陣と勧め奉る事

并内府信雄公と秀吉卿と和睦の事

天正十二年七月五日三州御所へ伊勢國桑名よ
著御よりゆりそれより濱田四日市場よ若と築を
あひ同十三日清洲よ還御ありけるよ羽柴宰相の
斥候樂田の邊へ出張しけるよ三州の御勢よく
あひと知てむり撃敵十餘人の首と得たり此由
江州へ聞えしう宰相秀吉卿大に驚とあひこと
あひ心惡と三州勢の弓矢うか秀吉中國西國よ向

三列勢
 分びます
 極り

ひ毛利浮田別所等の侍と軍しゆるみ何も敵の不
 意よ出て毎度勝利と得しよ三列勢と取合て一度
 も快く勝利と得しよ一別所浮田毛利の軍士鈍
 くしよ三列の兵士鋭とつりよみあはる別所とい
 つい赤松一家よ取傳へたる弓矢なり圓心則祐の
 餘烈あはる四方よ向てつりよ後と取しよ浮
 田と云も備前國邑久郡音湖三百貫の地頭より起
 り備前備中美作も切取て威と中國よ逞くと
 弱しと云へくしよ毛利ハ藝州吉田の領主より出
 て藝州と合と防長二州より九國よあしよ雲
 伯石隠并吞しと猛威と十列よ振ふ是等の家々の

軍勢多し
 分びます

軍勢多しハ十五六万よ及び少しとも二三万よ下
 らびそれ等と對陣も一合戦もしよるよののの
 ともあはるしよ事なりと然るは三列勢と打對ふ
 たりよ胸うちこころと手足の震ふと秀吉よりさよ
 り覺えさるしよありとてあを軍ハ勢の多少よあり
 び大将の心一つよありとてあはるしよ知たるはれ大
 將の心とつりよはるしよ三軍の心なり大将の心東
 み向へハ士卒よ東よ向ひ大将の心西よ向へハ
 士卒よ西よ向ふ士卒の心ハ百千万十万廿万三
 十万乃至百萬よ及へとも皆大将の心一つよ的と
 然とてその多くの士卒一人よとも大将の心よ

向くぬめの有はそれより一人叛と二人叛と
三人四人終二百千の人をか叛くより千丈の
堤も蟬螳の穴より崩るといつり三州の兵と用
ひあふ体と聞二百石の侍の鎗一本より草履取
具足持鎗持侍一人と召具とさとい千石の村と侍
十人召具十人草履取具足持鎗持三十人よ及ふ万
石よ五百人十万石よ五千人廿万石よ一万人あり
然してあの一万人をか耕地若干と領と故と兵糧
以下とつて中國の侍より身重く家富なり然
ハ父戦死して子父の功田と受功田段歩積りて
十百餘町よ及ふその富より累代の蓄なるといその

手厚とて中國の侍の及ふ処よあはれ三州の
兵少なくして力強く心猛と所以あり侍大将よ
酒井左衛門尉松平主殿助石川伯耆守大須賀五郎
左衛門尉大久保一黨本多黨井伊兵部渡邊黨内藤
一族戸田牧野奥平つとて所領よ住つる故所當
の乃貢の其外よ松もあり檜もあり竹も篠も家の
廻りよ満々たといの家を造るも塀垣あんとと修復
するもとて我屋鋪とて事たといの蔵入よ餘分
ありて不足なり我此人と軍して勝と得とも我兵
若干討つて其上よ根のくらなる木はうつし植
ても活ぬ道理よと三州武士ハ我用みたりと

めくして終る和睦とく和睦とてのちへ我天
下と太平ふあさん第一の味方たるへとわ
返りお返り歎息とてとひりうくして秀吉卿
陣觸ありて八月十六日濃州へ出張しあへ十九
日よの先手尾州小口羽黒よのこり廿一日上奈良
五郎丸よのわ出して屯とくる廿七日の早天よ松
平主殿助家忠ののこのこめ羽黒樂田の邊へ打て
出上方勢の陣取りよりして勢の多少と見つめり静
くよ引返りけるを見て上方勢ふれと追んとお
けるよ加藤虎之助とてめり追つて勢ふれの
虎之助とて置不申とのくふとの分際よてわ

い所と
かき流り
あつては
にちと
おのり
けり

の小勢よりけ合て何とてとて但後々の為よ
見覺あへや真先よ進よ馬武者三人その外よ徒
ののの二三十人むくくとく散たりあの人三人
の武者のうちよ大将あるへ徒のののつとも
小筒とてよ掛たりあの人筒の戦のこめあつて
合圖のためなりあつて切りたりたらん時あ
の小筒のひくを曲尺よ伏勢と引く料と知へ
あの人徒のののよ少引下りて雑人多く見えたり
あつてハ屠兒あり屠兒の種類多こののあつて
あつてハよ三州よてハ軍役よとて召使え
るはり何の用とてあつて實よ調寶と云へ手

負馬まをこの打取うちとりの始末しやうまつをくして屠兒とろこの役やくを
り其種類しゆしゆをゆ集あつむと速すみゆりよして忽たち二千二
の教しゆを寄より其次つぎは黒くろき法ほう被ひ着きるものありあ
せへ黒くろ鋏さきの者ものといひ高たかとめぬ百姓ひやくしやうあり山道やまみちを
切き開ひらけり川堀かわほりの道みち作つくらるる骨ほねとゆいまはるその
上うへに地下人ちかごあり何処どこも親おやしるもの多くて便たやす
り此方こなたの勢せいのうちよ一人ひとりも此邊こゝに知由しゆゆ
したるものあるまじくして不知しら案内あんないあるまじく三列さんれつ
勢せいへとく此所こゝもよりあまも知由しゆゆありて案内あんない
は熟じやくをり尤なほ様のものぬ掛合かけあて軍いくさしたるんは容易たやす
くくつとあひつと見ぬよりよと引ひたるはり

と指南しゆんとて上方かみ勢せい何なにとも嗚呼あゝと感かんけり廿八
日秀吉ひでよし卿きやう旗本はたもと計けいよて小堀こほりを放火はつかし清洲きよすに向むかふへ
る体ていとゆいまはる例れいの地下人ちかごともくく散ちりて速すみ
に清洲きよすに住進ぢゆんたりあつる三列さんれつ御所ごしよをく秀吉ひでよし
と打取うちとりへし時ときいつりぬと仰おほせ直ただに打立うちたてをぬ
岩倉いわくらより御動座ごどうざあり九月一日松平主殿まつだいらぬし助家忠樂すけただん
田いあへりへ打出うちだして新田しんたの働はたらをしるもの上方かみ勢せい見
ぬよりよと更さらに掛合かけあて家忠けだんのめよりよに亂妨らんぼうし
つるよ敵てきつてあをぬをんくしてそのあへり
ふ放火はつかして民屋たみや数十すうじゆ宇燒うりやうらるる勝関かつせきを揚あげて引取ひきと
たり秀吉ひでよし卿きやうへ十七日小堀こほりはあへりつととも三列さんれつ

勢更^其又出^其あひみ^其さる^其の秀吉卿いやく^其さく^其長陣
をん^其や^其と^其樂田^其に引返^其る^其廿五日^其上奈良川
田^其の要害^其と修築^其ひ人数^其と入置^其大垣^其に還^其ら^其とあ^其ふ
と^其使^其を三州^其御陣^其へ進^其ら^其と三月上旬^其遠州^其御發^其駕^其
より今日^其に至^其り既^其に五月^其ふ及^其ふ弓矢^其の意地^其を
立^其て前九年^其後三年^其のため^其もい^其三年^其四年^其陣^其と
ころ^其戦^其ひ^其と^其い^其事^其の^其め^其の^其く^其と^其い^其も^其あ^其る^其び
い^其へ共^其秀吉^其元^其より三州^其に怨^其も^其なく^其憤^其も^其なく^其い^其定^其
めて三州^其より^其も秀吉^其に御^其怨^其も^其御^其怒^其も^其あ^其る^其ま^其く
い^其北島^其殿^其の頼^其み^其ふ^其ふ^其り^其と^其如^其斯^其日^其数^其あ^其る^其ま^其く
鎗^其と^其ま^其く^其太刀^其と^其合^其を^其双^其方^其に^其死^其傷^其も^其い^其其^其罪^其も^其ふ

く^其其^其禍^其より^其い^其事^其の^其く^其り^其哀^其しく^其い^其
北島^其殿^其の^其め^其より秀吉^其抱^其き^其り^其て^其生^其育^其奉^其り^其
君^其達^其なり^其つ^其つ^其の^其重^其恩^其の^其主^其君^其の^其御^其子^其あり^其何^其と^其
情^其あり^其當^其り^其奉^其る^其ま^其く^其北島^其殿^其秀吉^其と^其討^其死^其し^其ま^其
へ^其御^其結^其構^其あり^其とも^其御^其年^其若^其の^其定^其め^其な^其る^其徒^其心^其よ^其ま^其
し^其も^其い^其の^其の^其と^其秀吉^其更^其に^其心^其より^其げ^其て^其お^其の^其い^其も^其を^其び
然^其に^其その^其北島^其殿^其の^其御^其援^其兵^其と^其御^其出^其陣^其あり^其と^其御^其
領^其の^其御^其政^其事^其怠^其り^其と^其あ^其ふ^其と^其近^其頃^其以^其て^其勿^其体^其なり^其と^其早^其
く^其御^其凱^其陣^其ま^其り^其い^其らん^其と^其第一^其の^其御^其仁^其政^其と^其覺^其え
ゆ^其と言^其上^其あり^其と^其御^其同^其心^其の^其ま^其り^其御^其答^其あり^其と^其十
月^其四^其日^其小^其牧^其の^其要^其害^其御^其修^其復^其と^其仰^其付^其ら^其る^其十日^其ま^其る^其べ

てよりあし成ぬと申上り十一月二日御巡見ありて松平主殿助家忠管沼新八即定盈小幡を守りし旨仰出され十六日酒井左衛門尉忠次とゆゑ清洲の御留守神原小平太康政小牧山を守りしへと仰付らば十七日濱松へ還御あしをゆゑ十一月六日秀吉より勢州へ發向する由告奉るのの有つるより同九日あし清洲へ御動座あり然るより同十一日秀吉富田左近津田隼人正と以て北畠殿へ御和睦の事を申上げり北畠殿も元より秀吉と殺しあはんともおぼしめされし秀吉より言上の旨御合點より足立清左衛門尉

と以て御和睦ありし由仰出されけるより秀吉卿されはるを内大臣との御心淺くまじりしと今よりのち御年うごひあし何れとの御事ありしとよきことよろし安き御方ありと打笑ひ此日矢田河原に於て秀吉卿御太刀備前國長義作二尺四寸五分ありしを獻しと拜禮し御和睦整ひしハ犬山の城と返り奉りけり

流布本も秀吉卿の先陣と三列勢の先陣と合戦をいとも勝負いよき定まらば然るも秀吉卿三列勢の勇猛ある感感しかり策をめぐらし尾列勢を引出し是を打やぶり始終の勝利を得たり

とちめをいけるより秀吉卿の旗本後陣の勢
を以て三列勢の旗本より左右へ責め、はへま
勢を見きり、はへまをいして尾列勢せめて一方を
救もぐやとちめひ備をおく出以三列勢ハハ孫
てより尾列勢出張せハ必定敗軍及ふへま
兼てちめをいめ、はへまハ御旗本ハ防戦の用意
嚴重よか、ちめひ御使番を以て尾列勢をとぐめ
られ、かとも元より思慮なき尾張武者を敵
合ちかく進こやりける、はへま蜂須賀彦右工門
つと見て五千人を一手とあ、三列勢へハハ、
ら以尾列勢又向ひ戦ふ尾列勢ハ一万余の大軍

形也とも蜂須賀父子は切立らば、色めきたちて
見えけるを内藤四郎左工門尉大須賀五郎左工
門尉二千余人みて援もぐやとちめひ、又思ひ
返して兩人蜂須賀と軍をいうち御旗本又軍あ
らば如何とへまと見合居ける処へ秀吉卿の先
手黒田父子二千余人み、御旗本へ切や、はへま跡
より秀吉卿の勢五千余人段々責め、はへまを見
むへとも少由御旗本、はへまは大山の動
くか如く静々と切や、はへまはより秀吉卿を
ちや黒田勢切負ぬへ、三好孫七郎中村孫平次
早く是をたまげよと下知、はへま承もぐやと

六月廿一編六三

御請申て二千余人黒田ははくきて責めしは是
 を見て池田古新輝政坂甚内安治前野勝右工
 門相屋助右工門仙石權兵衛いひし血氣の若
 めの大浪の打やくは如く寄たりしとも三列
 方ふハ大久保本多鳥居水野丹羽渡邊永井成瀬
 安藤必死まありし防ぎ戦ふ浅野長政尾列勢の
 横合より突やくり無二無三ま突くづさんと競
 ひやくりしハ尾列勢前ふハ蜂須賀の鋒まき
 強く責立らば軍まごふ難義ありける処へ又
 横合より浅野ま切立られ今ハとや總敗軍と見
 えさうりしとふ内藤四郎龍工門尉大須賀五郎

左衛門尉いひまきさのこ見合まへまといふ儘
 子面もふらば浅野ま突やくりおめきゆんて
 攻戦へハ尾列勢ハ蜂須賀ま追立られ内藤大須
 賀の手へあされやくり内藤大須賀ハ尾列勢を
 引退せんとせしるとし浅野蜂須賀まかけ向ひ
 火水まふれやと切結ふ秀吉卿此体を御覽し軍
 今やまを揉や侍ともあはれ浅責ま若めの共
 と立上りし下知しむへハ三列勢まてま危ふ
 く見えむひたり然るま本多酒井榊原井伊奥平
 大久保搦手まありし軍しけるや御旗本の軍急
 ありと見て其手を引上ける処へ加藤孫六嘉明

ちりてやうと逃さうと責付たつ庄桐平野細川
何とも續く攻戦ふを酒井左衛門尉榊原小平太
足輕をさくめり例のをもとめつて打立りか
の上方勢甲乙といふと知は六七十人をもり
と打倒さゆあをを見て福嶋市松と名乗る切て
かゆを本多平八郎とやめりやといふ
まゝも田原の正真を鍛たる長穂の鎗を打り
打り突たりしか福嶋もさくもやゆて見え
けるみぎ忠勝も福嶋を打きて御旗本へ
ま行御旗本への浅野蜂須賀をさくめ秀吉卿馬廻
りの大軍潮の涌如く寄たりしかともさくも

動しむる長閑やうも長柄をさくめて鎗腰を
助けまゝ鉄炮をうてせて長柄をいさめその間
も近めぐめの成り弓みて射おとす進退七十餘
合も及びひしかの上方勢目もあまゆ大軍ふれ共
さくたあく進もゆるか又引もせはたく真丸
も備えて息繼居たるを余も見あやら本多佐
渡守正信もさくも來りかゆか御大將の御手
を碎きむふかみあらはさや御引取然ふへと
志さうて諫め奉りける不とも内藤大須賀おめ
いさくやうとしかの切磨けられ忽ち一方のさり
開けはみより御所ふの圍を出させむひたり

とかくまふ処へ本多平八郎二十余人を前後左右に立て馳せし追掛奉る上方勢をさう拂ひ突破すゆと駈ぬけさあはれし浅野蜂須賀をさほあく御旗本を目かけ責付たり本多平八郎の只今まで切合突合たり上方衆を打とて御旗本は進みて浅野蜂須賀の脇より切やふ福嶋正則の忠勝をよき敵形つ遁さすしと責付し忠勝ふりやつり正則の馬の平頭を突けるふより馬狂い廻りて正則落馬しゆる其間忠勝の御旗本へせ加らる浅野蜂須賀の後よりおめいさやれ浅野蜂須賀の勢とも

總崩れし崩立四度路ありて見えなけり秀吉卿かくと見るより浅野蜂須賀を引上玉ひけるみより三列勢鳴海の邊まで落のひける追来る敵もあかりしあはれさすし休息し敗軍の士卒を集めらばあはれ本多黨大久保黨酒井井伊奥平をさめ追々走参る味方の討死八百余人手負の二千余人と記し然れ共今あはれ参り集るめの又一万八千余人及びいかに上方勢は馳向ひ今一軍といささか共日既夕陽はあはれさけるみより大久保彦左衛門忠教あはれ血氣をさゆるとおし止め本多平

八郎忠勝ふくひ壘を清正よとられ又秀吉卿
三列御所の鳴海におちりまふとを知て追しめ
以却て三列へ使者をたて御所よのをやく御
歸國ありて自國の進退をあしむひ重ねる出陣
あるへくその間北畠殿みせまるておしといそ
れし由を記さ且御所よの濱松へ還御秀吉卿ハ
八月八日樂田の陣を引くらひ京都へ歸陣淺野
彈正を樂田よのころしむひ信雄公との和睦勅定
あるふより十月廿日矢田河原みて參會といへ
今按は三列御所と秀吉卿と御合戦ありて三
列方打負鳴海まで御引退さあつし由云ハ全く

偽あり前ふものふとて天正十二年三月廿八日
小牧山を御本陣と御定ありし十月十七日
御凱陣よのりて鳴海まで御退陣あつしあつ
おし依て鳴海御引退の説ハ全流布本の偽なり
又本多佐渡守正信と記を誤り正信ハ一向黨
の時御國殘立退下弥八郎事なり彌八郎天正十
年春四十五歳の時召返され六月上林を説て宇
治道を開きしより暱近しゆとともその五位子
叙せし同十四年より小牧の時ハ彌八郎と
いふ又大久保彦九衛門忠教ハ永禄三年庚申の
誕生天正十二年ハ廿五歳あり本多忠勝ハ三十

七歳なり且人数持入して物頭あり又信雄公と
秀吉卿の和睦ハ十一月十一日入して十月廿日
入あらん十月廿日の秀吉いよ江列長濱に居
る入つ此和睦ハ勅定みあらん又秀吉卿樂田
を引拂ひ玉ひくハ九月廿五日入して八月八日
入あらん八月八日秀吉卿大垣に居るハ如是
數條の誤あるを以て流布本を取以

重修真書大閤記第十編卷之三終 二平三月廿八日

